

ラテンアメリカ：再エネ発電に存在感を増す エネル・グリーンパワー社¹

新エネルギー・国際協力支援ユニット
新エネルギーグループ

伊電力大手エネル（Enel）傘下のエネル・グリーンパワー社（Enel Green Power: EGP）はチリ、ブラジル、メキシコなどにおいて再エネ発電事業を積極的に展開し、チリ、ブラジルでは再エネ発電事業のトップ企業になっている。EGPはラテンアメリカを世界の再エネ発電事業の成長市場と捉え、今後とも投資を拡大する方針である。

EGPはチリに於いて約600MW（太陽光154MW、風力340MW、水力92MW）の再エネ発電所を所有し、本年5月、新たに2基の太陽光発電所（79MW Pampa Norte と 97MW Carrera Pinto）の建設を開始した。7月には、太陽光（160MW Finis Terrae）、風力（24MW Los Buenos Aires）、地熱（48MW Cerro Pabellon）合わせて3基の再エネ発電所の建設を開始し、本年、建設を開始した再エネ発電所の総容量は408MWに上る。

EGPはブラジルに約380MW（太陽光1MW、風力283MW、水力93MW）の再エネ発電所を所有している。現在建設中の発電所を合わせると総容量は約600MWとなる。これに加え、風力発電については昨年の特許で総容量200MWの風力発電所建設案件を落札し、本年4月、新たに90MW（Cristalândia）の案件を落札した。太陽光発電については、本年8月、2回目のリザーブ電源オークション（太陽光専用）に応札し、3件の案件（103MW Horizonte MP、158MW Lapa、292MW Nova Olinda）を落札している。

メキシコには約500MW（風力442MW、水力53MW）の再エネ発電所を所有し、今後229MWの風力発電所の建設を予定している。

EGPは2010年に新規株式公開を実施後、再エネ発電事業を世界的に展開し、現在、欧州、北米、ラテンアメリカ、アフリカの16カ国に総容量約10GWの再エネ発電所（太陽光474MW、風力6,010MW、地熱833MW、バイオマス44MW、水力2,624MW）を所有している。

同社の事業計画（2015–2019年）²によると、今後5年間に88億ユーロを投じて7.1GW

¹ 本稿は平成27年度経済産業省委託事業「国際エネルギー使用合理化等対策事業（海外における再生可能エネルギー政策等動向調査）」の一環として、日本エネルギー経済研究所がニュース等を基にして作成した解説記事です。

²

[http://www.enelgreenpower.com/en-GB-static/media_investor/presentations/doc/2015_06/EGP_Investor_presentation_\(September_2015\).pdf](http://www.enelgreenpower.com/en-GB-static/media_investor/presentations/doc/2015_06/EGP_Investor_presentation_(September_2015).pdf) 参照

の再エネ発電所を建設し、利益（金利・税金・原価償却費前）を 18 億ユーロ（2015 年）から 21 億ユーロ（2017 年）へ増大させるとしている。この中で、ラテンアメリカへは 47 億ユーロ（全投資額の 53%）を振り向け、3.1GW（総建設容量の 44%）の再エネ発電所を建設する計画で、対象国としてはチリ、ブラジル、メキシコが大部分を占めている。

EGP の事業実績（2010 - 2014 年）によると、再エネ発電所（4.3GW）の 45%が欧州、31%が北米、24%がラテンアメリカに建設された。新事業計画と比較すると同社のラテンアメリカシフトがはっきりと読み取れる。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp